

## ツェラーンと 1968 年の詩

金子英雄

### Abstract

Das Stereotyp, mit dem Celans Gedichte kritisiert werden, lautet, sie seien hermetisch und dunkel. Aber Celan selbst weist auf eine Aktualität seiner Gedichte hin, wenn er schreibt: „Glauben Sie mir — jedes Wort ist mit direktem Wirklichkeitsbezug geschrieben.“

Der Band *Schneepart*, der die Gedichte aus dem Zeitraum vom 16. Dezember 1967 bis zum 18. Oktober 1968 umfasst, bestätigt Celans obengenannte Äußerung. Damals nahm Paul Celan intensiv Anteil an den revolutionären Vorgängen in der Welt. Und in *Schneepart* verdichteten sich folgende Ereignisse von 1968: der Prager Frühling, der Pariser Mai, der Einmarsch der Truppen des Warschauer Paktes in die ČSSR, der Widerstand gegen die Rassendiskriminierung, die Attentate auf Martin Luther King und der Mordenanschlag auf Rudi Dutschke usw. Das waren die Ereignisse, in denen es um die Solidarität mit den Angehörigen einer unterdrückten Minorität, mit den Erniedrigten und Beleidigten dieser Erde geht. Paul Celan war ein Mann mit seinem „alten Herzen eines Kommunisten“.

**Keywords :** 日付と場所, 歴史的現実との対峙, 時の中庭, 反体制運動, パリの五月革命

パウル・ツェラーン (Paul Celan 1920—1970) の詩は、一見極めて抽象的で晦渋な様相を呈しながらも、実際には具体的な日付と場所をもった歴史的現実がその根底をなしている場合が多い。自死の翌年に刊行された、いわゆる遺稿詩集にして第八詩集である『雪のパート (Schneepart)』は、ツェラーン自身によって編集された最後の詩集であるが、この詩集には他の詩集との注目すべき相違点がある。すなわち、この詩集に収録された詩のひとつひとつに、詩が成立した日付と場所とが明記されるはずだったのである。「はずだったのである」という持って回った言い方をするには理由がある。ツェラーンが編集し清書して後に遺した『雪のパート』の原本に則って刊行されたはずの詩集や、その他の幾種類もの選集や全集から、清書された各詩の末尾に確かに付されていた日付と場所が、すべて抹消されてしまっているからである。おそらく遺稿の編集者たちは、それ以前の詩集においては、普段の原稿段階では個々の詩に日付や場所が付されている場合でも、印刷所にまわす決定稿段階でツェラーンがそれらを削り取ってしまった事実を考慮したのであろう。詰まるところ彼らは、ツェラーンが清書して遺した『雪のパート』を、決定稿と見なすべきではないと考えたのである。こうした判断が適切であるかどうかは、詩人亡き後とあってはその本意は知るべくもないため、どのようにも考えることが

できよう。しかし、『雪のパート』に収録された詩群は1967年12月16日から1968年10月18日までの間に成立したものであるが、この頃ツェラーンが次のような発言をしていることに注目しなければならない。

私が最近出した本 (=1968年に刊行された『詩選集 (Ausgewählte Gedichte)』のこと。筆者注) は、いたるところで暗号文的だとみなされています。信じてください——どの言葉も現実との直接的な関わりをもって書かれたものなのです。でも残念なことに、このことを皆は理解してくれようとはしません<sup>1)</sup>。

こうした発言からわかるのは、暗号文的で現実離れしたしろものだと、自己の詩にたいする相変わらずの世評に、ツェラーンが当時いかに苛立ちを覚えていたかである。だからこそ彼は、自己の詩の「現実との直接的な関わり」を強調しようとするのである。さらにまた彼は、詩集『雪のパート』に関して次のような発言もしている。

次の詩集 (= 第七詩集である『光の強迫 (Lichtzwang)』のこと。筆者注) のあとに出る詩集 (= 『雪のパート』のこと。筆者注) は、おそらく私が書いたうちで最も強力で最も大胆なものでしょう<sup>2)</sup>。

詩集『雪のパート』が、これまでの詩集のうちで「最も強力で最も大胆なもの」であるとの言明は、具体的にはどのような内実を指しているのか定かではない。だが、「現実との直接的な関わり」が、そうした内実を形成する主要因子であると考えすることはできないだろうか。詩が「現実との直接的な関わり」をもつとは、平たく言えば、その詩が具体的な日付と場所をもつ歴史的現実によって貫かれていることを意味する。すると、詩集『雪のパート』の各詩に付された日付と場所は、単なる備忘録的なものではなく、歴史的現実と自己との対峙をツェラーンが読者の前にこれまでになく明瞭にしようとした証左であり、したがって付記された日付や場所は、詩にとって欠くべからざる構成要素だということになるのではなからうか。

以上のようなことに拘らざるをえないのは、この詩集に収録された詩のほとんどが1968年に書かれており、そしてそれらの詩群が以前のどの詩集の場合にもまして、「現実との直接的な関わり」をもつもの、すなわち、1968年という年に生じた具体的な歴史的イベントを骨子とするものであることが、詩へ接近すればするほど明らかとなるからである。

1968年は、すこぶる特異な年であった。今になって思えば、この年は世界と時代とが、それ以前と以後とで大きく転換する分岐点となったのである。それは一口でいえば、地球規模で連鎖する反体制運動によって特徴付けられる年であったと言えよう。社会が資本主義に立脚しようと社会主義に立脚しようと、人間を管理して主体性を失わしめ、体制内へ同化しようとする勢力にたいして、人びとが異議申し立てを行い、個人の解放と自立を目指そうとする運動が多発したのが1968年なのであった。この年に立て続けに勃発した、政治的社会的な衝撃的事件の数々を、欧米を中心に思いつくままに列挙してみよう。ヴェトナム反戦運動。プラハの春。アメリカの公民権 (黒人解放) 運動。パリの五月革命を頂点とする、各国での大学闘争や反体制

運動。そしてそれらの運動によって招来されたキング牧師の暗殺事件やルディ・ドゥチュケの狙撃事件。ワルシャワ条約機構軍（ソ連軍を主力とする5ヵ国軍）のチェコスロヴァキア侵攻等々。ツェラーンは、そうした事件のほとんどに鋭く反応し、『雪のパート』の作品群へと昇華させていったのである。そうした作品群の中から、まずはキング牧師の暗殺事件やルディ・ドゥチュケの狙撃事件、それにパリの五月革命といったものが背景をなしている詩を取り出して、ツェラーンの1968年との関わり方の一端を探っていくことにしたいと思う。

\*

メイプスベリー・ロード

ひとりの黒人女の歩みの  
後ろから おまえに  
合図を送ってくる静寂。

その傍らに  
あの  
モクレン時間の半時計、  
別のところにも意味を探している——  
あるいはどこにも探していない  
ひとつの赤の前に。

そのとなりの、脳の、ひとつの盲管銃創を囲む  
充滿した  
時の中庭。

鋭く稲光が走った中庭の  
飲みもの 共有する空気。

自らを持ち越すことなかれ、おまえよ。

——

ロンドン，1968年4月14日/15日

MAPESBURY ROAD

Die dir zugewinkte  
Stille von hinterm  
Schritt einer Schwarzen.

Ihr zur Seite  
die  
magnolienstündige Halbuhr  
vor einem Rot,  
das auch anderswo Sinn sucht ——  
oder auch nirgends.

Der volle  
Zeithof um  
einen Steckschuß, daneben, hirinig.

Die scharfgehimmelten höfigen  
Schlucke Mitluft.

Vertag dich nicht, du.

——

London, 14./15. April 1968<sup>3)</sup>

この詩では、場所名が題名となっている。「メイプスベリー・ロード」。末尾に付された「ロンドン」がそれを裏付けてくれるのだが、これはロンドン北西部に実在する街路の名である。ツェラーンは1968年の4月3日から16日にかけて、ロンドンに住む父方の叔母を訪問した。そしてその訪問期間中に、欧米を揺るがすことになった二つの大きな事件が勃発したのである。4月

4日における、ノーベル平和賞受賞者にして、アメリカの黒人解放運動の指導者であったマーティン・ルーサー・キング牧師にたいする暗殺事件と、4月11日におけるドイツの学生運動の著名な指導者ルディ・ドゥチュケにたいする狙撃事件がそれである。『メイプスベリー・ロード』は、この二つの事件をめぐって成り立った詩にほかならない。それは、この頃ツェラーンが書いた書簡などが傍証してもくれるが<sup>4)</sup>、なによりも詩自体が呈示してくれている。以下において、詩全体にたいする分析および解釈の試みをなそうと思う。

「ひとりの黒人女の歩みの / 後ろから おまえに / 合図を送ってくる静寂。」

詩の第一節に登場するのは、ロンドンのメイプスベリー・ロードを歩いていく一人の黒人女性である。彼女が歩いていく姿を見つめる「おまえ」。「おまえ」とは、詩人自身であると考えてよからう。黒人女性の歩みの背後に、「おまえ」は「静寂」を感じ取る。そして同時にその「静寂」は、ひとつの「合図」として「おまえ」が感得するものでもあるとされる。

「静寂」といわれるものの正体は何であるのか。「静寂が送ってくる合図」とは、一体いかなる合図であるのか。それに答える前に、何よりも詩の第一節が、黒人にたいする差別撤廃運動に邁進していたキング牧師の暗殺事件を背景としていることを知る必要がある。銃撃によるキング牧師暗殺事件が詩句の背景であることは、四つに分けて詩の中で呈示されている。まず一つ目として、黒人女性の登場。二つ目として、詩の第二節で示される「赤」という血を思わせる色。三つ目としては、詩が書かれた日と事件勃発の日との近接。そして四つ目となるのが、詩の題名である。ロンドンの市街地図を見ると、「メイプスベリー・ロード (Mapesbury Road)」とは、「ウィルスデン・レイン (Willesden Lane)」という通りと「シュートアップ・ヒル (Shoot up Hill)」という通りとの間にあって、それら二つの通りを結ぶ街路の名であることがわかる。Willesden Lane には詩人の父方の叔母の家があり、ツェラーンはそこに滞在していたのであった<sup>5)</sup>。そして Shoot up Hill とは、和訳すれば「乱射が丘」なのである。また Mapesbury という語には「埋葬する」という意味をもつ bury という英語の動詞が隠されている。そうするとこの黒人女性は、銃弾が乱れ飛ぶ場所で凶弾の犠牲となった人の埋葬に参列しようと、「歩み」をすすめていると取ることができるのである。つまり詩の第一節が表わそうとするのは、ロンドンの街路を歩むひとりの黒人女性の姿に仮託させた、非業の死を遂げたキング牧師を悼む葬列に心の中でなりと連なろうとする、多くの名もなき黒人たちの姿なのである。したがって「静寂」とは、まずは黒人たちが抱く哀悼の深さであると詩人が考えるものの表現であり、無言でしか表しようのない悲しみの深さそのものの謂であると取れよう。それとも、キング牧師が体現していた政治的な非暴力主義をも表わそうとするものであるのかもしれない。そして「おまえ」は、その「静寂」の中に「合図」を感じ取る。それは、心の中でなりとも哀悼の葬列に連なり、黒人たちの悲しみに連帯せよという「合図」であるとまずは取るべきであろう。「合図」をそうしたものと受け取る要因としては、同じく社会的マイノリティとして黒人たちに似た境遇に置かれつづける一人のユダヤ人としての詩人自身の意識も大きく働いているのは間違いない。

だが、実はここに示される「静寂」の「合図」は、それだけのものではない。まずは「静寂」の中味である。この「静寂」は、「おまえ」の方へと「合図を送ってくる」のものである。つまり

この「静寂」は、単に静的で受動的であるのではなく、今ひとつの面を、すなわち動的で能動的な側面を背中合わせにした「静寂」なのである。ハイデガーの熱心な読者であったツェラーンは、おそらくこの詩の「静寂」に、ハイデガーがその著作『言葉（Die Sprache）』で言うところの「静寂」を含意させている。ハイデガーは次のように述べている。

…（略）…安らぎはその本質を、静めるということのうちにもつ。静寂の静めようとする働き（das Stillen der Stille）として、この安らぎは、厳密に考えてみると、あらゆる運動よりも絶えず動的であり、どのような動きよりも常に活動的なのである<sup>6)</sup>。

言葉は、静寂の響き（das Geläut der Stille）として語る<sup>7)</sup>。

「静寂の静めようとする働き」は、「あらゆる運動よりも絶えず動的であり、どのような動きよりも常に活動的」であるとハイデガーは言う。ツェラーンの詩の第一節における「静寂」が、ハイデガーの「静寂」の場合と同じように、「絶えず動的」であって「常に活動的」なるものであることが、第二節以降においてそれと並置されるものとの関係によってやがて明らかになり、合わせて「静寂」およびそれが送ってくるとされる「合図」の中身も示されることになるであろう。先走って言えば、詩『メイプスベリー・ロード』にあっては、「静寂」のまわりに並置されるものたちが集まって、第三節で「時の中庭」と呼ばれる場が形成されてゆく。そしてそこから一つの「響き」が、非人間的事象にたいする抗議の声となって奏でられることになるという構図が見て取れるのである。

「その傍らに / あの / モクレン時間の半時計、 / 別のところにも意味を探している—— / あるいはどこにも探していない / ひとつの赤の前に。」

第二節は場所を示す副詞句でもって始まる。「その傍らに」の「その（Ihr）」という人称代名詞は、第一節における「黒人女」を指すとも、あるいは「静寂」を指すとも取れるが、やはり第一節の主体である「静寂」を指していると取りたい。ひめやかに歩む黒人女性の背後にひそむ「静寂」の傍らに、「モクレン時間の半時計」があるとされる。「静寂」の「合図」によってわれわれがまず誘われるのは、「モクレン時間の半時計」のもとへである。

第一節の黒人女性の歩みの背景として呈示される「静寂」と、それと並置される「モクレン時間の半時計」。「モクレン」とは、四月を中心とした春に、あでやかな白色や赤紫色の花をつける庭木あるいは街路樹である。メイプスベリー・ロードでは、開花期を迎えたモクレンの花が道行く人の目を楽しませていたのであろう。ちょうど詩が成立した時期に、滞在中のロンドンから友人や妻に書き送った手紙の中で、ツェラーンがモクレンに関して述べているのが分かっている。その一つの書簡では、モクレンに関して次のように言っている。

ここではモクレンが咲いています——かつてチェルノヴィッツにいたときのように、それらを感じ取り、香りをかぐことができたと思います<sup>8)</sup>。

「かつてチェルノヴィッツにいたときのように」。ツェラーンはロンドンの街路に咲くモクレンの花やその香から、生まれ育った故郷の町を、かつてのハプスブルク帝国領内の辺境に位置するブコヴィーナ地方の町チェルノヴィッツを思い出したのである。モクレンとはツェラーンにとって、故郷の町を、そしてそこで暮らした若き日を想起させずにはおかない花でもあるのだ。だから「モクレン時間」とは、モクレンの開花時である四月という華やかな春の季節を表わすとともに、故郷で暮らした若い日々をも同時に意味するものであろう。ならば、「半時計」(Halbuhr)とは何であるのか。halbとは形をあらわす語であるのか、それとも数量的なものなのか。この詩には、時間に関わる語と結びつく単語がいくつか使用されている。形容詞の magnolienstündig、名詞の Zeithof、および命令形として用いられている動詞 vertagen であり、それぞれ Stunde (時間)、Zeit (時、時代)、Tag (日、昼) という名詞との合成語あるいは派生語である。それからすると、halb は時間と関わる数量的な意味で使用されていると取るべきであり、したがって Halbuhr とは、時計があらわす時間の半分である 12 時間を、すなわち、一日の半分のあらわす時計という意味での「半時計」ということになるだろう。通常一日は昼と夜とに折半される。ではこの「半時計」は、昼をあらわす時計であるのか、それとも夜を表わすのか。それは「半時計」を形容する magnolienstündig によって明らかであろう。直訳すれば「モクレン時間の」であるが、これは「モクレンの花が咲く時間の」、すなわち、一日のうちであてやかなモクレンの花を目にすることができる時間の意とも取れるのであり、したがってこの「半時計」は昼を表わすものであるということになる。実際に街路沿いに日時計のようなものがあつたのかもしれないが、この場合の「半時計」はもっと抽象的な意味をもつものとして、つまり顕在的な、明るい昼間の光景、何事もなく平和なたたずまいを見せる日中の街角の情景そのものをあらわすものと取るべきであろう。これが、第一節の黒人女性の歩みの背景なのである。

だが、平和そのものに思える日常の、そのまた背後にあるものへと、われわれは再び誘われてゆくことになる。なぜなら、「モクレン時間の半時計」の背後には、「ひとつの赤」がひそんでいとされるからである。「赤」という、突如差し出される人目をうばう色彩。具体的には「半時計」の後ろに赤く花咲くモクレン(紫木蓮)があるというのであろうが、第一節との関係で、この「赤」はまずもってキング牧師暗殺事件で流された血の色を指すものでなければならない。

そして又この「赤」は、「別のところにも意味を探している」のである。「別のところ」とは、キング牧師暗殺事件とは別のところ、の意であろう。キング牧師暗殺は、白人至上主義者たちによる人種差別が惹き起こした事件であるのは誰の目にも明らかなどころである。したがってドイツ系ユダヤ人であるツェラーンにあって、血の色としての「赤」に結びつく「別のところ」としてまず第一に考えられるのは、おなじく人種差別が惹起した、ナチスによるユダヤ人の大量殺戮事件であるホロコーストであろう。ツェラーン個人としても、その若い日において、強制収容所へと移送された両親が相前後して収容所内で非業の死を遂げるにいたつたという体験を持っている。キング牧師の射殺を知つたツェラーンが、とりわけ項を撃たれて殺害されたと伝えられる最愛の母のことを想起しないはずがない。ツェラーンにとって、両親をも含めたそうしたユダヤ人たちの無惨な死は、今も「意味」を求め続けているのである。

しかし又この「赤」を、具体的な血の色としてだけではなく、より抽象的に社会的かつ政治的な色として捉えることも可能であろう。キング牧師が指導した公民権運動とは、差別撤廃を

求めるアメリカの黒人解放運動であるとともに、普遍的には人間個人の自立と解放、自由で平等な共同社会をめざす運動でもあった。したがって「別なところ」として、すなわちこうした方面における「赤」として、ツェラーンの場合、生まれ故郷チェルノヴィツのギムナジウムの生徒時代に始まって、アンビバレントな様相を見せながらも、終生彼から離れることのなかった、左翼的な世界観を象徴するものとしての赤色が考えられよう。この詩が書かれる数年前にも、今も自分が「 коммуニストの古き魂」を心に抱いているといったことをツェラーンは友人にたいして述べているからである<sup>9)</sup>。それにまた詩の「赤」をこうした意味での「赤」とした場合、「あるいはどこにも探していない」という次の詩句が生きてくる。クロポトキンやグスタフ・ランダウアーに共感してやまないアナーキスト的左翼思想の信奉者であるツェラーンにとって、理想のコミュニズムの世界は、スターリニズムの手垢に染まったソヴィエト連邦など言うに及ばず、いまだこの地上にあっては「どこにも (=nirgends)」存在しないユートピア (Utopia=*Nirgendland*) なのであるから。

「そのとなりの、脳、ひとつの盲管銃創を囲む / 充滿した / 時の中庭。」

「そのとなりの」の「その」とは、第二節の主体である「半時計」および「赤」を指しているとするべきだろう。「半時計」のとなりに、すなわち平和なたたずまいの昼間の光景や、様々な意味をもつ赤い色のかたわらに、「ひとつの盲管銃創」が置かれることになる。「盲管銃創」とは、撃ち込まれた銃弾が身体を貫かず体内にとどまる負傷のことである。「脳」とあるように、この場合の盲管銃創は、脳内に弾丸がとどまる負傷である。そしてこの「盲管銃創」が何をあらわしているのかは、キング牧師の場合と同じように、詩に付された日付との近接などから明らかになる。それは、1968年4月11日に起きた、ドイツの学生運動の指導者であったルディ・ドゥチュケへの銃撃事件に他ならない。この日ドゥチュケは、右翼新聞に煽られたとされる青年によって、体に三発の銃弾を受けて重傷を負い、その負傷のうちの一つが脳内に弾丸がとどまる「盲管銃創」だったのである。また詩における「盲管銃創」の当事者がドゥチュケであることは、ツェラーン自身の発言によっても確認できる<sup>10)</sup>。そしてこの「盲管銃創」は「充滿した / 時の中庭」に囲まれてあるとされる。「充滿した」とあるのは、この「時の中庭」といわれるものの中には、「盲管銃創」ばかりでなく、第二節の「赤」や「半時計」といったものも含まれてあるからであろう。「充滿した (voll)」という語には、「満ちた、いっぱい」といった意味のほか、「全部の、完全な」といった意味もある。すると *der volle Zeithof* は、「完全な、全部のものとなった時間の庭」、第二節の「半時計」にたいして、24時間という完全な時間、すなわち「昼」ばかりでなく「夜」をも含んだ庭ということになる。

「充滿した時の庭」とは、「昼」という可視のもの、日常的なものに関わる体験だけではなく、「夜」という不可視のもの、非日常的な体験に関わるものをも包含する空間を表わす。それはツェラーンがある手紙の中で、「時の中庭」という言葉は哲学者フッサールの用語であると言っていることから明らかである<sup>11)</sup>。そしてフッサールは、この「時の中庭」に関連して、「顕在的体験は非顕在的体験の庭に取り囲まれている」という言い方をしている<sup>12)</sup>。するとこの詩の *der volle Zeithof* とは、「ひとつの盲管銃創」でもって表される顕在的体験——1968年4月11日という日

付において生じたドゥチュケ襲撃事件——と、それを取り囲む非顕在的体験、すなわち詩の第一節および第二節で暗示されたようなキング牧師暗殺事件、強制収容所における両親やユダヤ人たちの非業の死といったもの、およびそうしたものにまつわる数々の事件や体験を包含した時空なのである。そうした事件や体験が「盲管銃創」と関係づけられるのは、いずれもが脳内にとどまる弾丸のように、われわれの脳裏から忘れ去られることのないもの、また決してわれわれが忘れ去ってはならないものだからであろう。したがって「時の中庭」とは、ツェラーンが講演『子午線』で言うところの、「1月20日」を出発点とする時空の周りに集結するものたちによって形成される「子午線」そのものの、今ひとつの表現であるといつてよい<sup>13)</sup>。そのことは次に来る詩句によっても確認されよう。

「鋭く稲光が走った中庭の / 飲み物 共有する空気。」

「鋭く稲光が走った」の「稲光が走った」と訳したドイツ語 *gehimmelt* は、動詞 *himmeln* の過去分詞形が形容詞化したものである。*himmeln* には「(ベッドなどに) 天蓋を付ける」という他動詞としての意味もあるが、ツェラーンが過去に一度だけ用いた用例では、「稲光がする、稲妻が走る」という意味を表わす非人称動詞として使われており<sup>14)</sup>、この場合もそうした意味で用いられていると取ることにしたい。「鋭く稲光が走った」が形容する名詞「飲み物 (*Schlucke*)」は、複数形になっている。この「飲み物」は、また「中庭の / 飲み物」、すなわち中庭としての飲み物でもある。とすると、「中庭の / 飲み物」とは、キング牧師暗殺事件とドゥチュケ襲撃事件という、「おまえ」が短時日に立て続けに体験することになった二つの事件を指すことになろう。「飲み物」と「共有する空気」は同格となっている。これは、二つの「飲み物」、すなわちキング牧師暗殺事件とドゥチュケ襲撃事件は、同じ「時の中庭」の中で生じた事件であり、二つの事件の間には、共通する時代的雰囲気の流れがあり、共通する世界的傾向がうかがわれると言いたいのであろう。そしてこれら二つの事件は、「鋭く稲光が走った」と形容されている。これは、二つの事件が、来るべき時代の危機的な兆候であり、大いなる警告としての意味をもつ事件であると感じられたことの強調であろう。そして、それを受けて最終節の一行が来るのである。

「自らを持ち越すことなかれ、おまえよ。」

「自らを持ち越すことなかれ (*Vertag dich nicht*)」と、「おまえ (*du*)」にたいする命令形として使用される動詞 *vertagen* は、「(議会や法廷などの期日・日取りを) 延期する、持ち越す」といった意味をもつ。人が自分自身を持ち越すとは、現在の自分を維持する、自分の気持ちや考え方を長く変えずにいることを言うのでなければならない。するとそれを否定するこの詩句は、自分を絶えず変化・変革せよという要求ということになろう。自分を絶えず変化・変革するためには、個人が思考の自立性の上に立っていなければならない。二つの事件、キング牧師暗殺とドゥチュケ襲撃とが引き起こされたのは、異分子を体制内から排除しようとする、時の保守的・反動的勢力によってである。かれらは自己を変化・変革させることは決してない。自己の体制内

への同一化をこととするかれらは、思考の自立性といったものとはまったく無縁なのである。こうした点で、この頃の次のようなツェラーンの発言は看過し得ないものである。

西独、つまりドイツとの関連に限ってのことではありませんが、私はいまなお変化や転換を期待しております。代理の体制がそれらをもたらしてくれることはないでしょう。そして革命は——社会的であると同時に反権威的なそれは——変化や転換からのみ考えることが出来ます。それは、ドイツで、今日ここで、個々人のもとで始まるものなのです。<sup>15)</sup>

革命というものを考えるとき、ツェラーンは社会的体制の単なる転覆を是認するのではない。一つの体制の転覆は、権威的管理的という点では何ら代わり映えのしない代理の体制を生むに過ぎないのであるから。したがって彼が是認する革命は、自己の変革に立脚した社会の変革であり、あくまでも個人を軸に、社会を絶えざる変化や転換のうちに置くことにある。こうした考え方は何もツェラーン独自のものではなく、当時の社会体制に対する異議申立てを旨とした者たちのそれでもあったことは、1968年を象徴する運動の立役者の一人であった人物の次のような発言からも知れる。

われわれは、体制全体に、異議申立てを行ない続けてゆくのだ<sup>16)</sup>。

革命的行動によって、あらゆる段階で社会のたえざる変化を惹き起こすことをわれわれは目的としている…（略）…<sup>17)</sup>

上記の発言は、ユダヤ系ドイツ人であり、1968年当時パリ大学ナンテール校の学生で「赤毛のダニー」という異名を取った、いわゆる「パリ五月革命」のカリスマ的指導者ダニエル・コーン＝ベンディットが、五月革命の最中である5月20日にソルボンヌで哲学者サルトルと行なった対談からの抜粋である。このコーン＝ベンディットとドゥチュケとの間には、深い関わりがある。二人は、1968年2月に西ベルリンで催された「国際ヴェトナム会議」に出席し、議論を交し合っている。そしてまたドゥチュケ襲撃事件のあと、西独の学生運動の代表がコーン＝ベンディットの招聘によりパリ大学ナンテール校を訪れ、演説を行ったのであるが、それが「パリ五月革命」の一つのきっかけともなるとされている<sup>18)</sup>。パリの高等師範学校（エコール・ノルマル・シュペリユール）のドイツ語講師であったツェラーンは、詩『メイプスベリー・ロード』を書いて以降、否応なく「パリ五月革命」という反体制運動の渦中に巻き込まれることとなるが、少なくとも運動の初期にあっては、コーン＝ベンディットを中心とした若者たちの側に立っていたことは確かである。そのことは、若者たちの運動に批判的な左右両翼のジャーナリズムにたいする次のような苛立ちからも感得できよう。

なぜなら、数日前の《ミニユット》（＝フランスの極右の新聞。筆者注）の第一面に次のようにあったからだ、——「赤い過激派どもにはうんざりだ！ 粗暴なヴァンダール人部隊の首領、ドイツ人コーン＝ベンディットを追放するのに何を躊躇うのか？」（傍点部の原文

はフランス語。筆者注)と。

なぜなら、《ユマニテ》(=フランス共産党の機関紙。筆者注)までもが、「ドイツ人のアナーキスト」コーン=ベンディットと「アメリカで暮らしているドイツ人ヘルベルト・マルクーゼ」をやっかい払いしたがつっているからだ<sup>19)</sup>。

そしてまたツェラーンはこの頃、学生たちに混じって実際に何度もストライキに参加したりもしているのである。

…(略)…ナンテールとパリにおける騒動のあとで、ストライキが呼びかけられていて、いつものようにほくもストに参加するつもりである…(略)…<sup>20)</sup>

コーン=ベンディットの前掲の発言からも分かるように、かれら若者たちの運動が目指す目標は、「誰かが考えた特定のシステムをとまなう理想的とされる社会の樹立ではなく、社会を構成する人びと自身の決定によって、絶えず自己創出できる社会の樹立<sup>21)</sup>」なのである。組織や綱領がものをいう非人間的な管理社会の解体を目指し、社会をまずもって流動的な状態に置こうとするかれらの志操は、アナーキズムと呼べる。そしてツェラーン自身のコーン=ベンディットをはじめとする若者たちへの共感も、前にも述べたが<sup>22)</sup>、若年から終生保ち続けられたクロボトキンやランダウアーといったアナーキストにたいする親近感から来るものであろう。また、コーン=ベンディットは「黒と赤」(Noir et rouge)というアナーキストグループに属していたことが知られている。黒はドイツ語では Schwarz であり、赤は Rot である。不思議なことに詩『メイプスベリー・ロード』には、これら二つの色が印象深く登場させられているが、まったくの偶然なのであろうか。

ツェラーンはやがてパリの学生たちを中心とする運動から距離を置くようになっていくが、紙幅の都合でそこまで論じることは出来ない。その代わりに、今ひとつツェラーンとパリの五月革命との関わりという点で興味深い作品を見ておきたいと思う。

エリックのために

FÜR ERIC

メガホンの中で  
歴史が掘り返されている、

In der Flüstertüte  
buddelt Geschichte,

郊外で装甲車が害虫を駆除している、

in den Vororten raupen die Tanks,

ほくらのグラスは  
絹糸でいっぱいになる、

unser Glas  
füllt sich mit Seide,

ほくらは立つ。

wir stehn.

パリ、トゥルヌフォール通り、68年6月2日

Paris, Rue Tournefort, 2. 6. 68<sup>23)</sup>

詩の題名にある「エリック」とは、この年13歳になったツェラーンの一人息子の名である。この頃家族と離れて一人で暮らしていたツェラーンのもとへと、息子が訪ねてきたのである。息子は、多感な年齢に差し掛かっていた少年らしく、五月革命を闘う若者たちに共鳴していた。ツェラーンの下宿先であるトゥルヌフォール通りのアパートから、コントルスカルプ広場あるいはカルチェ・ラタンは目と鼻の先である。カルチェ・ラタンでの学生と警官隊との激しい衝突は、三週間ほど前のことであった。騒擾の余韻がまだ残る街中を、この日ツェラーン父子は二人して歩いたのである。

「メガホンの中で / 歴史が掘り返されている」

すると父子は、街頭でのアジテーションあるいはデモンストレーションに遭遇したのである。このアジテーションあるいはデモンストレーションは、「パリ五月革命」を闘う若者や労働者たちのそれであろうか。そうかもしれないし、そうではないかもしれない。詩が書かれた日付に留意しなければならない。5月も下旬にさしかかると、若者たちの革命熱やパリ市民たちの若者たちにたいする期待もようやく翳りを見せはじめ、それとともに体制側の反撃が始まることになった。この詩が書かれた三日前の5月30日には、一時身をくらましていたド・ゴール大統領が、軍の支持を取り付けて姿を現し、フランスが国際共産主義の暴力によって脅かされている、などとラジオを通して大時代的で反動的な演説を行なった。そして、これに呼応して、その日の夕べには右派による政権支持のデモ隊が組織され、60万人ものド・ゴール支持のデモ隊がシャンゼリゼ通りを行進したのである。上記の詩句は、その際のデモ隊のアジテーションやシュプレヒコールの内容について言うのかもしれない。右派のアジテーションならば、おそらくフランス大革命、二月革命、そしてパリ・コミューンなどといった歴史的事件を槍玉にあげ、左翼的思想の弊害についてあることないことをメガホンでがなり立てたであろう。また反体制の場合であったら、そのアジテーションは同じ歴史的事件をあげながら、それに参加した革命的民衆を称揚し、その衣鉢を継ぐ誓いの言葉をメガホンを通して唱えたことであろう。いずれにしても、「メガホンの中で / 歴史が掘り返され」たのである。

「郊外で装甲車が害虫を駆除している」

ド・ゴールが一時姿を消したのは、西ドイツ駐留フランス軍司令官にパリ進軍を求めるためであった。ド・ゴールは軍の支持を確約させ、そして5月30日には陸軍の機甲部隊がパリ郊外に待機し、「パリ五月革命」を闘う勢力に睨みを利かすことになる。上記の詩句はそうした状況を背景としているのである。「害虫を駆除している」と和訳した動詞 *raupen* は、「(木や野菜に付く毛虫や青虫などの害虫を) 取り除く、駆除する」という意味を持つ。「害虫」とは、体制側にとってはもちろん五月革命を支持する勢力のことである。この詩句にはまた、ユダヤ人が害

虫呼ばわりされて強制収容所で抹殺されたナチス時代が遠く反響させられているのかもしれない。五月革命の指導者コーン＝ベンディットは、ユダヤ系ドイツ人であった。極右の連中が彼をどう呼んだか、言わずもがなのことであろう。

「ぼくらのグラスは / 絹糸でいっぱいになる」

ツェラーン父子は散策のあと、おそらくコントスカルプ広場あたりのとある喫茶店に入り、飲み物の入ったグラスを前に歓談したのである。だが、二人のグラスに満たされているのは通常の飲料ではなく、「絹糸」であるとされる。これはどういうことであるのか。

raupen の名詞形 Raupe は、「毛虫、青虫」であるが、Seide（絹、絹糸）との合成語 Seidenraupe は「蚕」である。ツェラーン父子の会話は、もちろん五月革命をめぐるものであろう。この頃急進化してゆく運動や、害虫呼ばわりされる運動の指導者たちについて、少年は父親に素朴な疑問をぶつけたのかもしれない。しかしツェラーンは、そうした少年の疑問に答えて、自己の信奉する無政府主義的な左翼思想、人間の自由と平等を求めるクロボトキンやランダウアーに基づく左翼思想を、少年に理解できる表現で擁護したのであろう。そしてそうした思想の信奉者たちは、反動的な勢力が呼ぶような「害虫」などでは決してなく、理想の社会を目指す美しい「絹糸」のような思いを心中にみなぎらせた「蚕」のような存在であることを説いたのであろう。そしてキング牧師ばかりでなく、ドゥチュケや、そして誰よりも息子の頭の中を占めていたであろうコーン＝ベンディットも、本来そうした「蚕」のような存在であることを、ふたりは確認しあったのであろう。そうして父子の心の中は、理想の社会を目指すたちに連なる思いで満たされていったのである。上記の詩句の「グラス」とは、そうしたふたりの心そのものの表現にほかならない。

「ぼくらは立つ」

「立つ」とは、多くの評家も指摘するように、ツェラーンにあっては何よりも非人間的で反動的な勢力にたいして抗って「立つ」こと、抵抗することを意味する。いま父子は、そうした立場に立つ自分たちを確認し合ったのである。それはまた、成長してゆく息子にたいして、そうした立場に立ってかれがこれからの人生を歩み続けることを願ってやまない父親としてのツェラーンの、強い気持ちの表現でもあるのだろう。

ツェラーンは五月革命の時期、息子と二人でパリの街中を歩きながら、ロシア語やイディッシュ語やフランス語で、「インターナショナル」やその他の革命歌を歌ったとのことであり、そしてまた息子の方でもそうした父親を誇らしく思っていたと伝えられている<sup>24)</sup>。数年来精神病院への入退院を繰り返し、前年の晩秋以来妻子との別居にまで至らざるをえないような精神的苦境の只中であつたツェラーンにとって、1968年の出来事のうちでも特にパリの五月革命は、一時的にしる理想に燃えた若き日を蘇らせてくれた貴重な日々であつたことが、上記の詩によって知れるのである。

注

- 1) Wolfgang Emmerich: Paul Celan. Reinbek bei Hamburg 1999, S.11 f.
- 2) Paul Celan / Ilana Shmueli, Briefwechsel. Frankfurt am Main 2004, S.86.
- 3) Paul Celan: Schneepart. Tübinger Ausgabe. Frankfurt am Main 2002, S.61. この版は、日付と場所の付された、ツェラーンが生前自ら編集し清書した詩集『雪のパート』の原形を掲載している。本稿における『雪のパート』からの詩の引用はもっぱらこの版に基づいており、ここからの引用はTAと略記し、アラビア数字で頁数を示すことにする。
- 4) Vgl. Paul Celan / Franz Wurm, Briefwechsel. Frankfurt am Main 1995, S.140.
- 5) Paul Celan: Die Gedichte. Herausgegeben und kommentiert von Barbara Wiedemann. Frankfurt am Main 2003, S.840.
- 6) Martin Heidegger: Unterwegs zur Sprache. Gesamtausgabe Band 12. Frankfurt am Main 1985, S.26.
- 7) A.a.O., S.27.
- 8) Paul Celan / Gisèle Celan-Lestrange, Briefwechsel I . Frankfurt am Main 2001, S.538.
- 9) Vgl. Petre Solomon: Briefwechsel mit Paul Celan 1957-1962. In: Neue Literatur, 32 Jahrgang, Heft 11, 1981, S.75.
- 10) Paul Celan: Die Gedichte, a.a.O., S.841.
- 11) A.a.O., S.841.
- 12) E. フッサール『内的時間意識の現象学』立松弘孝訳、1971年、みすず書房、216頁。
- 13) ツェラーンにおける「1月20日」および「子午線」が意味するものに関しては、拙論「ツェラーンの詩『ひとつに』をめぐって」、2006年、立命館言語文化研究 18巻1号 131—144頁を参照。
- 14) Paul Celan: Gesammelte Werke in fünf Bänden. Bd. I , Frankfurt am Main 1983, S.76. この版に基づくツェラーンからの引用は、GWと略記し、ローマ数字で巻数を、アラビア数字で頁数を示すことにする。
- 15) GW III , S.179.
- 16) ジャン＝ポール・サルトル、ダニエル・コーン＝ベンディット「想像力が権力をとる」（海老坂武訳）『現代革命の思想8 学生運動』、1969年、筑摩書房、255頁。
- 17) 同書、257頁。
- 18) 井関正久『シリーズ・ドイツ現代史II ドイツを変えた68年運動』、2005年、白水社、76—77頁。
- 19) Celan / Wurm, Briefwechsel, a.a.O., S.146.
- 20) A.a.O., S.147.
- 21) 江口幹『パリ68年5月——反逆と祝祭の日々』、1998年、論創社、51頁。
- 22) 前掲の拙論、136—138頁を参照。
- 23) TA, S.83.
- 24) John Felstiner: Paul Celan. Eine Biographie. München 1997, S.327.